

# 新設A看護系大学生の領域別実習前における心理社会的状況の検討

著者名(日)	櫻井 美奈, 中原 るり子, 岸田 泰子, 佐藤 京子
雑誌名	共立女子大学看護学雑誌
巻	3
ページ	38-48
発行年	2016-03
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1087/00003093/">http://id.nii.ac.jp/1087/00003093/</a>

研究報告

## 新設 A 看護系大学生の領域別実習前における 心理社会的状況の検討

Investigation of psychosocial status of university students  
at a newly established Nursing University “A”  
prior to their beginning clinical practice

櫻井 美奈      中原るり子      岸田 泰子      佐藤 京子  
Mina Sakurai      Ruriko Nakahara      Yasuko Kishida      Kyoko Sato

キーワード：看護学生、臨地実習、不安、コミュニケーション・スキル、ソーシャル・サポート

key words : nursing student, clinical practice, anxiety, communication skills, social support

### 要 旨

新設 A 看護系大学生における臨地実習前の不安、実習意欲、実習期待、コミュニケーション・スキル（以下、CS）、ソーシャル・サポートの心理社会的状況と変数間の関連を検討し実習指導に役立てることを目的に対象者 85 名に質問紙調査を行い、以下を明らかにした。

①実習前の状態不安および特性不安は高かった。②実習意欲は中程度であるが実習期待は高かった。③CSでは「他者受容」「解読力」が高く、「表現力」「自己主張」は低いと自覚していた。④ソーシャル・サポートを受けていると知覚していた。⑤心理社会的変数間には相互に関連を認めた。なかでも状態不安と関連を認めた特性不安は、CSの「自己統制」「関係調整」と負の相関を示した。このことから不安の高い者は感情のコントロールや気持ちを他者に伝えることが苦手である可能性が示唆された。

以上から不安の強い学生への慎重な関わりとアサーティブなCS向上への支援の必要性が示唆された。

### Abstract

The aim of this study was to investigate the psychosocial status of nursing college students regarding their *anxiety*, *training motivation*, *training expectations*, *communication skills*, and *social support*, prior to the start of their clinical practical training, and the relationships between these variables, in order to provide useful guidance information for instructors. To achieve this, we had 85 nursing students complete a paper questionnaire at the newly established University A, and uncovered the following findings;

(1) Students' state and trait anxiety were both high before training commencement. (2) Training motivation was moderate, whereas training expectations were high. (3) In terms of the students' communication skills, their "acceptance of others" and "decoding ability" were noticeably high, while "expressive ability" and "assertiveness" were low. (4) Students perceived themselves to be receiving social support. (5) Psychosocial variables were observed to be mutually related. In particular, trait anxiety, which itself was found to be related to state anxiety, exhibited negative correlations with the communication skills of "self-control" and "relational maintenance". This implied that high-anxiety individuals may have weak emotional control and struggle to convey their feelings to others.

The above findings suggested the necessity for instructors to connect particularly with high-anxiety students, and provide assistance to these students in improving their communication skills so that they are able to be more assertive.

## I はじめに

看護学生の臨地実習前の不安<sup>1-7)</sup>やストレス<sup>2) 7)</sup>は高いことが知られており、健康障害との関連も指摘されている。臨地実習に向かう学生の不安の内容は、実習で接する看護師や患者、教員、実習グループの仲間との関係性というコミュニケーションに関するものが主であり、その他に、自分が上手く実習を行えるのか、実習記録などの実習ノルマを達成できるのかといった項目が質的研究によって明らかにされている<sup>1) 3) 4)</sup>。その一方で、看護学生は、患者との良好な関係性、自己の成長、看護の喜びを知る、グループメンバーとの良好な関係性といった期待や意欲を実習に対して抱いていることも報告されている<sup>1) 3) 4)</sup>。

看護学生の臨地実習への不安の関連要因について、岡部<sup>6)</sup>は、人間関係や学習などの実習不安と特性不安、状態不安との関連を指摘している。また、三浦ら<sup>8) 9)</sup>は学校ストレス反応の軽減には家族サポートや友人サポートといったソーシャル・サポートが有効であることを明らかにしている。これらの先行研究から、臨地実習前の看護学生の心理社会的状況には、不安、実習意欲、実習期待、コミュニケーション・スキル、ソーシャル・サポートなど複数の要素が存在し、それらは相互に関連し合っていると推察された。

しかしながら、臨地実習前の看護学生を対象として前述の心理社会的変数を一度に調査した研究はなく、また、学生の傾向は年々変化しており、現在の学生の状況が、かつての学生の状況と一致しているとは限らない。更に、新設大学が増加した今日において、看護学部生の臨地実習前の心理社会的状況を把握することは新設看護系大学の実習指導に一定の示唆を与えるものと考ええる。

## II 目 的

新設 A 看護系大学の学生における領域別実習前の不安、実習意欲、実習期待、コミュニケーション・スキル、家族や友人・知人からのサポートの心理社会的状況と変数間の関連を検討し、実習指導における基礎資料を得ることが目的である。

## III 方 法

本研究のデザインは関連探索型量的研究である。

### 1. 調査対象者

都内 A 大学看護学部の 3 年次領域別実習に向かう女子学生 87 名のうち、研究への同意が得られた 85 名である。

対象者は 20 代の女子学生であり、1 年前期に基礎看護学実習 I（見学およびコミュニケーション）、2 年後期に基礎看護学実習 II（看護過程の展開）、3 年前期で高齢者看護学実習 I を履修している。

### 2. 調査期間

2015 年 7 月 31 日に実施した。

### 3. 調査方法

3 年後期から始まる全領域別実習（成人看護学実習 I・II、高齢者看護学実習 II・III、小児看護学実習、母性看護学実習、精神看護学実習、在宅看護論実習 I・II）のオリエンテーションの参加を終えた対象者に対して、無記名自記式質問紙調査を実施した。

### 4. 調査内容

#### 1) 状態不安（STAI-X I 型：20 項目 4 件法）と特性不安（STAI-X II 型：20 項目 4 件法）

State-Trait Anxiety Inventory (STAI) は、Spielberger (1970) の、不安を状態としての不安と特性としての不安とにわけて考える「不安の特性・状態モデル」に基づく尺度である。日本語翻訳版 (1982 年) は、原版と同様の高い信頼性と妥当性が得られている<sup>10)</sup>。

「状態不安」とは、緊張や懸念という比較的うつろいやすい感情としての不安である。この尺度は、今現在の気持ちを問う 20 項目 4 件法から構成されており、高得点であるほど状態不安が高いことを意味している。

「特性不安」とは比較的安定した特性としての不安である。普段の気持ちを問う 20 項目 4 件法からなる質問紙で、高得点であるほど特性不安が高いことを意味している。

## 2) 実習意欲 (自作質問紙: 1項目7件法)

看護学生の実習意欲に関する尺度は報告されていなかったため、自作の質問項目を作成した。「これから始まる領域実習にむけた自分の意欲の程度を該当する番号に○を囲んでお答え下さい」の質問に「全く意欲がもてない」から「意欲がある」までの7件法で回答を求めた。

## 3) 実習期待 (自作質問紙: 5項目7件法)

前川ら<sup>3)</sup> および渡辺ら<sup>1)</sup>の質的な先行研究を参考に「自分の成長」「患者との関わり」の2項目と、研究者間で検討した3項目とを追加して「①自己の成長」「②受け持ち患者さんとの良好な関係」「③実習指導者との良好な関係」「④共に実習する実習グループ間での良好な関係」「⑤教員からの適切な指導」の合計5項目の質問紙を作成した。回答は「全くそうでない」から「とてもそうである」までの7件法で、得点が高いほど実習期待が高いことを意味している。

## 4) コミュニケーション・スキル (ENDCORE: 6項目7件法)

藤本・大坊ら<sup>11)</sup>が2007年に開発したENDCORE (簡易版) は、コミュニケーション・スキルを表出系 (Encode)・反応系 (Decode)・自己統制 (Control)、関係調整 (Regulate) に分けてその頭字語を組み合わせて命名された尺度である。原版のENDCOREs (sはscaleを表す) は、6種類のメインスキルとそれぞれ4つのサブスキルの合計24項目から構成されている信頼性と妥当性が検討された尺度である。簡易版は6種類のメインスキルから1問ずつ質問をするもので、「①自分の感情や行動を上手くコントロールする (自己統制)」「②自分の考えや気持ちを上手く表現する (表現力)」「③相手の伝えたい考えや気持ちを正しく読み取る (解読力)」「④自分の意見や立場を相手に受け入れてもらえるように主張する (自己主張)」「⑤相手を尊重して相手の意見や立場を理解する (他者受容)」「⑥周囲の人間関係にはたつきかけ良好な状態に調整する (関係調整)」から構成されている。回答は「かなり苦手」から「かなり得意」までの7件法で、得点が高いほどコミュニケーション・スキルが高いことを意味している。ただし、簡易版の信頼性と妥当性は検討されていない。

## 5) ソーシャル・サポート (ソーシャル・サポート尺度: 6項目7件法)

石毛ら<sup>12)</sup>の先行研究を参考に、久田ら<sup>13)</sup>が作成した学生用ソーシャル・サポート尺度を修正した中学生版から、「知覚されたサポート」に関する6項目を使用した。この尺度は「①元気がないとすぐに気づいて励ましてくれる」「②悩みや不満を言ってもいやな顔をしないで聞いてくれる」「③何か失敗してもそっと助けてくれる」「④ふだんから気持ちをよくわかってくれる」「⑤何か悩んでいるときにどうしたらよいか教えてくれる」「⑥重要なことを決めるときアドバイスしてくれる」から構成されている。回答は「全くそうでない」から「とてもそうである」の7件法で、得点が高いほどサポートを得ていると知覚していることを意味している。

本研究では、サポート源を家族、友人・知人の2種類として、それぞれ家族サポート、友人・知人サポートとして回答を求めた。ただし、本尺度は中学生を対象としたものであり、看護学生を対象とした尺度としての妥当性は検討されていない。

## 5. 分析方法

心理社会的変数についてそれぞれの質問項目得点の総和を算出し記述統計量を求めた。STAIおよび単一項目である実習意欲以外の変数についてはクロンバックの $\alpha$ 係数を算出して信頼性としての内的整合性を確認したのち、変数間の関連性をピアソンの積率相関を用いて確認した。尺度の信頼性と妥当性が十分に検討されていない心理社会的変数については、質問項目毎の関連性も検討した。なお、分析にはSPSS ver. 22を用いた。

## 6. 倫理的配慮

対象者に文書および口頭にて研究の主旨を説明し、同意が得られた者を対象として質問紙調査を行った。同意できない場合は、調査用紙を未記入のまま提出してもらうよう説明を加えた。学生の精神的影響を最小限にするよう、本研究に不参加である場合でも全く不利益を受けない旨を説明した。調査は無記名であり、分析は個人を特定できない方法で行い、プライバシー保護に努めることを約束した。データおよび結果の取り扱いは研究



者のみが行い、研究と実習指導に関する目的以外に使用しない、研究終了後は記入されたデータは破棄するなどの策を講じた。

調査に当たっては、事前に研究者の所属する大学の研究倫理審査委員会の承認を得た（承認番号 KWU-IRBA#15076）。

## Ⅳ 結 果

### 1. 心理社会的変数の概要

表 1 に心理社会的変数のクロンバックの  $\alpha$  係数と記述統計量を、表 2 に STAI-X を除く心理社会的変数の質問項目における平均値と度数分布を示した。

#### 1) 状態不安 (STAI-X I 型：20 項目 4 件法) と特性不安 (STAI-X II 型：20 項目 4 件法)

85 名の状態不安の平均値（標準偏差）は 54.71 ( $\pm 9.22$ ) であった。高不安とされる 42 点以上 50 点以下の学生が 26 名 (30.5%)、非常に高い不安とされる 51 点以上の学生は 53 名 (62.4%) であった。

85 名の特性不安の平均値は 52.61 ( $\pm 9.31$ ) であった。高不安とされる 45 点以上 54 点以下の学生が 36 名 (42.3%)、非常に高い不安とされる 55 点以上の学生は 35 名 (41.2%) であった。

#### 2) 実習意欲 (自作質問紙：1 項目 7 件法)

有効回答者 76 名の実習意欲の平均値は 4.68 ( $\pm 1.07$ ) であった。度数分布は表 2 の通りで、「4」が 23 名 (27.1%)、「5」が 29 名 (34.1%)、「6」が 14 名 (16.5%) で、「4」「5」「6」のいずれかを選択した学生数は 76 名中 66 名 (77.7%) であった。

#### 3) 実習期待 (自作質問紙：5 項目 7 件法)

クロンバック  $\alpha$  係数は 0.86 であった。85 名の

平均値は 28.13 ( $\pm 4.46$ ) であった。全質問項目において「5. まあ期待している」「6. 期待している」「7. とても期待している」のいずれかに回答した学生が 85 名中 72 名 (84.7%)～77 名 (90.6%) となっていた。

最も平均値が高かった項目は「⑤教員からの適切な指導」の 5.91 ( $\pm 1.12$ ) であり、次いで「④実習グループ間での良好な関係」の 5.78 ( $\pm 1.14$ ) であった。

#### 4) コミュニケーション・スキル (ENDCORE: 6 項目 7 件法)

クロンバック  $\alpha$  係数は 0.81 であり、85 名の平均値は 24.54 ( $\pm 4.99$ ) であった。どの質問項目においても「3. やや苦手」「4. ふつう」「5. やや得意」のいずれかに回答する学生が 85 名中 65 名 (76.4%)～70 名 (82.4%) となっていた。

平均値が最も高かった項目は「⑤相手を尊重して相手の意見や立場を理解する (他者受容)」の 4.64 ( $\pm 1.05$ ) であり、次いで「③相手の伝えたい考えや気持ちを正しく読み取る (解読力)」の 4.38 ( $\pm 1.13$ ) であった。一方、最も低かった項目は「②自分の考えや気持ちを上手く表現する (表現力)」の 3.58 ( $\pm 1.19$ ) であった。

#### 5) ソーシャル・サポート

##### (1) 家族サポート (ソーシャル・サポート尺度：6 項目 7 件法)

クロンバック  $\alpha$  係数は 0.96 であり、85 名の平均値は 31.24 ( $\pm 9.27$ ) であった。

平均値が最も高かった項目は「②悩みや不満を言ってもいやな顔をしないで聞いてくれる」の 5.48 ( $\pm 1.66$ ) であり、最も低かった項目は「①元気がないと、すぐに気づいて励ましてくれる」の 4.94 ( $\pm 1.82$ ) であった。

表 1 心理社会的変数のクロンバックの  $\alpha$  係数と記述統計量

	項目数	$\alpha$ 係数	N	平均値	標準偏差	最小値	最大値
状 態 不 安	20	—	85	54.71	9.22	28	76
特 性 不 安	20	—	85	52.61	9.31	29	74
実 習 意 欲	1	—	76	4.68	1.07	1	7
実 習 期 待	5	0.86	85	28.13	4.46	16	35
コミュニケーション・スキル	6	0.81	85	24.54	4.99	11	38
家族サポート	6	0.96	85	31.24	9.27	6	42
友人・知人サポート	6	0.92	85	31.75	6.07	15	42

表2 心理社会的変数の質問項目における平均値と度数分布

	N	平均値	標準偏差	1 n (%)	2 n (%)	3 n (%)	4 n (%)	5 n (%)	6 n (%)	7 n (%)
実習意欲	76	4.68	1.07	1 ( 1.2%)	1 ( 1.2%)	6 ( 7.1%)	23 (27.1%)	29 (34.1%)	14 (16.5%)	2 ( 2.4%)
領域実習にむけた自分の意欲の程度										
①自己の成長に期待している	85	5.35	1.07	1 ( 1.2%)	1 ( 1.2%)	1 ( 1.2%)	8 ( 9.4%)	39 (45.9%)	23 (27.1%)	12 (14.1%)
②受け持ち患者さんとの良好な関係に期待している	85	5.52	1.06	0 ( 0.0%)	0 ( 0.0%)	3 ( 3.5%)	10 (11.8%)	30 (35.3%)	24 (28.2%)	18 (21.2%)
③実習指導者との良好な関係に期待している	85	5.58	1.15	0 ( 0.0%)	0 ( 0.0%)	6 ( 7.1%)	7 ( 8.2%)	25 (29.4%)	26 (30.6%)	21 (24.7%)
④共に実習する実習グループ間での良好な関係に期待している	85	5.78	1.14	1 ( 1.2%)	0 ( 0.0%)	2 ( 2.4%)	5 ( 5.9%)	25 (29.4%)	25 (29.4%)	27 (31.8%)
⑤教員からの適切な指導に期待している	85	5.91	1.12	0 ( 0.0%)	1 ( 1.2%)	1 ( 1.2%)	8 ( 9.4%)	18 (21.2%)	24 (28.2%)	33 (38.8%)
コミュニケーション・スキル										
①自分の感情や行動をうまくコントロールする	85	3.89	1.17	1 ( 1.2%)	13 (15.3%)	12 (14.1%)	33 (38.8%)	20 (23.5%)	6 ( 7.1%)	0 ( 0.0%)
②自分の考えや気持ちをうまく表現する	85	3.58	1.19	4 ( 4.7%)	12 (14.1%)	23 (27.1%)	26 (30.6%)	17 (20.0%)	3 ( 3.5%)	0 ( 0.0%)
③相手の伝えたい考えや気持ちを正しく読み取る	85	4.38	1.13	0 ( 0.0%)	6 ( 7.1%)	8 ( 9.4%)	33 (38.8%)	28 (32.9%)	6 ( 7.1%)	4 ( 4.7%)
④自分の意見や立場を相手に受け入れてもらえるように主張する	85	3.86	1.13	0 ( 0.0%)	10 (11.8%)	22 (25.9%)	30 (35.3%)	18 (21.2%)	3 ( 3.5%)	2 ( 2.4%)
⑤相手を尊重して相手の意見や立場を理解する	85	4.64	1.05	0 ( 0.0%)	3 ( 3.5%)	7 ( 8.2%)	26 (30.6%)	34 (40.0%)	12 (14.1%)	3 ( 3.5%)
⑥周囲の人間関係にはたきかけ良好な状態に調整する	85	4.34	1.06	2 ( 2.4%)	4 ( 4.7%)	3 ( 3.5%)	40 (47.1%)	27 (31.8%)	8 ( 9.4%)	1 ( 1.2%)
家族サポート										
①あなたに元気がないと、すぐに気づいて励ましてくれる	85	4.94	1.82	4 ( 4.7%)	4 ( 4.7%)	16 (18.8%)	7 ( 8.2%)	16 (18.8%)	14 (16.5%)	24 (28.2%)
②あなたが悩みや不満を言ってもいやな顔をしないで聞いてくれる	85	5.48	1.66	3 ( 3.5%)	2 ( 2.4%)	7 ( 8.2%)	10 (11.8%)	14 (16.5%)	15 (17.6%)	34 (40.0%)
③あなたが何か失敗してもそっと助けてくれる	85	5.15	1.68	3 ( 3.5%)	4 ( 4.7%)	7 ( 8.2%)	15 (17.6%)	14 (16.5%)	18 (21.2%)	24 (28.2%)
④ふだんから、あなたの気持ちをよくわかってくれる	85	5.09	1.73	2 ( 2.4%)	7 ( 8.2%)	9 (10.6%)	10 (11.8%)	16 (18.8%)	17 (20.0%)	24 (28.2%)
⑤あなたが何か悩んでいるときにどうしたらよいか教えてくれる	85	5.14	1.62	2 ( 2.4%)	5 ( 5.9%)	8 ( 9.4%)	10 (11.8%)	22 (25.9%)	15 (17.6%)	23 (27.1%)
⑥あなたが重要なことを決めるときアドバイスしてくれる	85	5.42	1.68	3 ( 3.5%)	3 ( 3.5%)	5 ( 5.9%)	12 (14.1%)	17 (20.0%)	11 (12.9%)	34 (40.0%)
友人・知人サポート										
①あなたに元気がないと、すぐに気づいて励ましてくれる	85	5.20	1.25	0 ( 0.0%)	2 ( 2.4%)	7 ( 8.2%)	15 (17.6%)	21 (24.7%)	28 (32.9%)	12 (14.1%)
②あなたが悩みや不満を言ってもいやな顔をしないで聞いてくれる	84	5.57	0.97	0 ( 0.0%)	0 ( 0.0%)	1 ( 1.2%)	11 (12.9%)	26 (30.6%)	31 (36.5%)	15 (17.6%)
③あなたが何か失敗してもそっと助けてくれる	85	5.38	1.04	1 ( 1.2%)	0 ( 0.0%)	1 ( 1.2%)	13 (15.3%)	29 (34.1%)	31 (36.5%)	10 (11.8%)
④ふだんから、あなたの気持ちをよくわかってくれる	85	5.13	1.22	0 ( 0.0%)	1 ( 1.2%)	7 ( 8.2%)	19 (22.4%)	23 (27.1%)	23 (27.1%)	12 (14.1%)
⑤あなたが何か悩んでいるときにどうしたらよいか教えてくれる	84	5.37	1.16	1 ( 1.2%)	1 ( 1.2%)	2 ( 2.4%)	14 (16.5%)	21 (24.7%)	34 (40.0%)	11 (12.9%)
⑥あなたが重要なことを決めるときアドバイスしてくれる	85	5.24	1.21	0 ( 0.0%)	2 ( 2.4%)	4 ( 4.7%)	19 (22.4%)	19 (22.4%)	29 (34.1%)	12 (14.1%)

## (2) 友人・知人サポート（ソーシャル・サポート尺度：6 項目 7 件法）

クロンバック  $\alpha$  係数は 0.92 であり、85 名の平均値は 31.75 ( $\pm 6.07$ ) であった。

平均値が最も高かった項目は「②悩みや不満を言ってもいやな顔をしないで聞いてくれる」の 5.57 ( $\pm 0.97$ ) であり、最も低かった項目は「④ふだんから気持ちをよくわかってくれる」の 5.13 ( $\pm 1.22$ ) であった。

## 2. 心理社会的変数間の関連

表 3 に心理社会的変数間の相関係数を示した。ここでは有意水準 1% 以下のものについて説明する。

状態不安と特性不安に有意な相関 ( $r=0.49$ ) が、特性不安とコミュニケーション・スキルには有意な負の相関 ( $r=-0.28$ ) が認められた。実習意欲と実習期待に有意な相関 ( $r=0.33$ ) が示され、コミュニケーション・スキルと友人・知人サポートに有意な相関 ( $r=0.42$ ) が認められた。さらに、家族サポートと友人・知人サポートに有意な相関 ( $r=0.34$ ) が確認された。

## 3. 心理社会的変数の質問項目間の関連

表 4 に心理社会的変数の質問項目間の相関係数を示した。同一変数内の質問項目間では有意な関連を示すものが多く認められた。ここでは心理社会的変数間に関連が認められた質問項目間の関連について、有意水準 1% 以下のものに限定して説明する。

## 1) 特性不安とコミュニケーション・スキル

特性不安はコミュニケーション・スキルの「①自分の感情や行動をうまくコントロールする（自己統制）」( $r=-0.31$ )、「⑥周囲の人間関係にはたらきかけ良好な状態に調整する（関係調整）」( $r=-0.29$ ) に有意な負の相関を確認した。

## 2) 実習意欲と実習期待

実習意欲と実習期待の「①自己の成長に期待している」に有意な相関 ( $r=0.52$ ) を確認した。

## 3) コミュニケーション・スキルと友人・知人サポート

コミュニケーション・スキルの「④自分の意見や立場を相手に受け入れてもらえるように主張する（自己主張）」「⑤相手を尊重して相手の意見や立場を理解する（他者受容）」「⑥周囲の人間関係にはたらきかけ良好な状態に調整する（関係調整）」の項目は、友人・知人サポートのほぼ全ての項目と有意な相関 ( $r=0.28 \sim 0.49$ ) を認めた。

## 4) 家族サポートと友人・知人サポート

友人・知人サポートの「①元気がないとすぐに気づいて励ましてくれる」と家族サポートの「①同上」( $r=0.35$ )、および「③何か失敗してもそっと助けてくれる」( $r=0.29$ ) とに有意な相関を確認した。

友人・知人サポートの「③何か失敗してもそっと助けてくれる」と家族サポートの「①元気がないとすぐに気づいて励ましてくれる」( $r=0.39$ )、「②悩みや不満を言ってもいやな顔をしないで聞いてくれる」( $r=0.34$ )、「③何か失敗してもそっと助けてくれる」( $r=0.30$ )、「④ふだんから気持ちをよくわかってくれる」( $r=0.37$ )、「⑤何か悩

表 3 心理社会的変数間の相関係数

	状態不安	特性不安	実習意欲	実習期待	コミュニケーション・スキル	家族サポート	友人・知人サポート
状態不安	—						
特性不安	0.49**	—					
実習意欲	-0.11	-0.04	—				
実習期待	-0.15	-0.03	0.33**	—			
コミュニケーション・スキル	-0.05	-0.28**	0.06	0.13	—		
家族サポート	-0.07	-0.20	0.22	0.20	0.20	—	
友人・知人サポート	-0.13	-0.07	0.04	0.24*	0.42**	0.34**	—

\*\*  $p<0.01$  \*  $p<0.05$

表4 心理社会的変数の質問項目間の相関係数

	状態不安	特性不安	意欲	期待①	期待②	期待③	期待④	期待⑤	コミュニケーション①	コミュニケーション②	コミュニケーション③	コミュニケーション④	コミュニケーション⑤	コミュニケーション⑥	家族サポート①	家族サポート②	家族サポート③	家族サポート④	家族サポート⑤	家族サポート⑥	友人サポート①	友人サポート②	友人サポート③	友人サポート④	友人サポート⑤	友人サポート⑥
状態不安	—																									
特性不安	0.49**	—																								
実習意欲	-0.11	-0.04	—																							
期待①	-0.11	-0.07	0.52**	—																						
期待②	-0.20	-0.11	0.12	0.37**	—																					
期待③	-0.18	-0.03	0.20	0.37**	0.77**	—																				
期待④	-0.01	0.06	0.29*	0.48**	0.51**	0.64**	—																			
期待⑤	-0.12	0.00	0.21	0.35**	0.60**	0.75**	0.62**	—																		
コミュニケーション① スキル①	-0.10	-0.31**	0.00	0.00	0.06	0.01	-0.03	0.05	—																	
コミュニケーション② スキル②	-0.05	-0.27*	-0.09	0.04	0.06	-0.04	-0.08	-0.02	0.42**	—																
コミュニケーション③ スキル③	0.00	-0.13	0.07	0.18	0.27*	0.15	0.08	0.08	0.49**	0.49**	—															
コミュニケーション④ スキル④	-0.05	-0.14	0.15	0.17	0.19	0.15	-0.03	0.15	0.19	0.62**	0.25*	—														
コミュニケーション⑤ スキル⑤	0.02	-0.08	0.14	0.08	0.18	0.16	0.15	0.20	0.45**	0.30**	0.51**	0.37**	—													
コミュニケーション⑥ スキル⑥	-0.04	-0.29**	-0.06	-0.03	0.08	-0.04	-0.05	0.00	0.38**	0.46**	0.51**	0.23*	0.50**	—												
家族サポート①	-0.11	-0.12	0.18	0.14	0.13	0.07	0.11	0.12	0.05	0.12	0.03	0.36**	0.26*	0.11	—											
家族サポート②	-0.01	-0.20	0.27*	0.24*	0.19	0.07	0.27*	0.09	0.03	0.13	0.07	0.27*	0.21*	0.21	0.76**	—										
家族サポート③	-0.12	-0.21	0.20	0.13	0.09	0.04	0.22*	0.10	0.02	-0.02	-0.08	0.17	0.17	0.11	0.74**	0.82**	—									
家族サポート④	-0.11	-0.23*	0.19	0.12	0.17	0.04	0.21*	0.07	0.08	0.13	0.07	0.30**	0.30**	0.17	0.85**	0.83**	0.85**	—								
家族サポート⑤	-0.02	-0.17	0.18	0.19	0.21	0.17	0.35**	0.19	0.04	0.06	-0.03	0.21	0.20	0.06	0.70**	0.76**	0.79**	0.83**	—							
家族サポート⑥	0.00	-0.17	0.15	0.17	0.09	0.05	0.22*	0.05	0.08	0.13	0.05	0.27*	0.13	0.04	0.67**	0.76**	0.77**	0.81**	0.81*	—						
友人サポート①	-0.03	0.03	0.02	0.05	0.22*	0.22*	0.20	0.27*	0.01	0.05	0.12	0.37**	0.35**	0.29**	0.35**	0.27*	0.29**	0.24*	0.24*	0.26*	—					
友人サポート②	-0.15	-0.12	-0.04	0.02	0.21	0.18	0.08	0.18	0.13	0.14	0.15	0.29**	0.24*	0.29**	0.21	0.26*	0.23*	0.18	0.14	0.25*	0.61**	—				
友人サポート③	-0.13	-0.09	0.08	0.07	0.26*	0.17	0.20	0.22*	0.06	0.18	0.16	0.38**	0.44**	0.30**	0.39**	0.34**	0.30**	0.37**	0.33**	0.26*	0.64**	0.64**	—			
友人サポート④	-0.10	-0.07	0.01	0.03	0.21	0.22*	0.23*	0.27*	0.16	0.25*	0.27*	0.42**	0.49**	0.43**	0.26*	0.27*	0.21	0.27*	0.24*	0.22*	0.77**	0.62**	0.70**	—		
友人サポート⑤	-0.11	-0.05	0.13	0.10	0.12	0.07	0.25*	0.14	0.15	0.18	0.21	0.28**	0.45**	0.41**	0.14	0.23*	0.17	0.22*	0.16	0.18	0.60**	0.51**	0.66**	0.73**	—	
友人サポート⑥	-0.11	-0.10	0.03	0.05	0.13	0.07	0.08	0.10	0.21	0.26*	0.25*	0.38**	0.38**	0.40**	0.20	0.27*	0.20	0.25*	0.18	0.33**	0.67**	0.61**	0.56**	0.76**	0.81**	—

(注) 友人サポートは、友人・知人サポートの両方である。

\*\* $p<0.01$  \* $p<0.05$



んでいるときにどうしたらよいか教えてくれる」( $r=0.33$ )の5項目とにそれぞれ有意な相関を確認した。

友人・知人サポートの「⑥重要なことを決めるときアドバイスしてくれる」と家族サポートの「⑥同上」とに有意な相関( $r=0.33$ )を確認した。

## Ⅵ 考 察

### 1. 臨地実習前の不安

今回調査した看護系大学生の臨地実習前の状態不安得点の平均値 54.71 ( $\pm 9.22$ ) は、成人女性 36.6 ( $\pm 9.06$ )<sup>14)</sup> や大学生 46.8 ( $\pm 8.49$ )<sup>15)</sup> と比較すると高かった。また、中里ら<sup>14)</sup> が示した女性の高不安者群 (42 以上) に該当する者は 85 名中 79 名 (92.9%) を占め、非常に高い不安群 (51 以上) に該当する者は 53 名 (62.4%) であった。ただし、飯出ら<sup>4)</sup> が示した 3 年課程の看護系短期大学生の実習前の状態不安得点 (52.4) とほぼ同じ水準であったことから、本研究の対象者の臨地実習前の不安は極めて高い水準にあるものの、他の看護系大学と同様の傾向を示していると考えられる。

領域別看護実習では、看護系大学生が受け持ち対象者の看護過程を展開しながら必要な看護を提供することが主な課題となる。学生は不慣れな病院で、実習指導者、教員、対象者など多様な人々と関係調整を行いながら、毎日課せられる実習記録にも対応しなくてはならない。また、学生同士で学内練習してきた援助技術を実際の対象者に実施することになる。この経験は患者の役に立てるといふ楽しみである反面、失敗は許されないため強い不安や緊張を伴うものである。2 週間が過ぎれば、また新たな環境下での実習が始まり、心が休まる時は多くない。こうした学生の未経験なものへの不安や緊張が、今回の状態不安得点に反映されたと考えられる。先行研究では、臨地実習前より実習中の状態不安はさらに高くなることも報告されており<sup>2)</sup>、実習前に既に高不安の状態にある学生においては、十分な配慮が必要なことが示唆された。

状態不安はイベントによっても左右されるが普段の不安状態の影響もうけることが知られている<sup>10)</sup>。今回調査した看護系大学生の特性不安得点の平均値 52.61 ( $\pm 9.31$ ) は、成人女性 39.1 ( $\pm 9.90$ )<sup>14)</sup> や大学生 48.3 ( $\pm 8.30$ )<sup>15)</sup>、3 年課程の看護系短期

大学生 45.2<sup>4)</sup> よりも高い水準にあった。臨床的な判断基準と比較すると高不安者 (45 以上)<sup>14)</sup> を超えた者が 71 名 (83.5%) であり、非常に高い不安群 (55 以上) に該当する者は 35 名 (41.2%) であった。この結果から、本研究の対象者は臨地実習というイベントの前に限らず、普段から極めて高い不安を抱えていたことがうかがえた。今回調査した看護系大学生は、新設学部 1 期生であり、入学当初より先輩のいない環境下で常に新しいカリキュラムに挑みながら学生生活を送ってきている。科目の内容や勉強の仕方、試験期間の乗り切り方、今後の見通しなど、先輩からの情報提供やアドバイスを受けられない 1 期生のこの特殊性により、特性不安は高まり、普段から不安が強まりやすい状況があったと推察される。

### 2. 臨地実習前の実習意欲

看護系大学生の臨地実習への意欲は中程度で、実習期待との関連は認められたものの状態不安や特性不安との有意な関連性は認められなかった。Deci<sup>16)</sup> は、人間の内発的動機づけが高まる条件として、課題を自分にとって意味があると感じること、課題自体のおもしろさ、自律性の感覚を伴った自己の有能性の感覚があることを挙げている。今回の調査で、看護系大学生の実習前の意欲と自己の成長への期待に関連 ( $r=0.52$ ) が示されたことから、学生は実習を意味あるものと受け止めていると考えられる。しかし、意欲を高めると考えられる他の 2 側面については調査ができていない。今後は実習課題への興味・関心、および、看護過程展開や援助技術提供に対する自己効力感などの項目も加え、質問紙の精度を上げて検討する必要がある。

### 3. 臨地実習前の実習期待

実習への期待は、不安が高いにもかかわらず高く、なかでも「教員からの適切な指導」「共に実習する実習グループ間での良好な関係」に寄せる期待が高かった。臨地実習の場は、大学から切り離された空間である。見知らぬ人々に囲まれた環境の中で教員とグループの学生は数少ない既知の存在である。頼る人が限られた状況で、教員は学生側に立ってサポートしてくれる頼れる味方であって欲しいし、実習グループメンバーは同じよ

うな想いを共有し、協力して厳しい状況を乗り切る同志であって欲しいと願う気持ちは理解できる。この結果は教員や実習グループの学生に対する信頼の現れとも読み取れるが、前川ら<sup>3)</sup>のいう「他力本願な考え」の現れとも読み取れる。

前川ら<sup>3)</sup>の調査によれば、学生は看護師に自分を大事にして欲しいと感じ、患者に対しても条件の良い患者であって欲しいと思っており、自分の実習が上手くいくために、自分を取り巻く環境が優しく条件の良いものであって欲しいと考えている。これを前川らは「他力本願な考え」と呼び、このような他者に依存する期待は、自分の事前準備の努力で解消できないため、実習に向かう前向きな姿勢を阻害しかねないと考察している。実習意欲は中程度でありながらも、実習期待は高いという今回の結果とも一致している。

また、伊藤ら<sup>17)</sup>は高すぎる目標設定は、結果が伴わなかった際にネガティブな情動を引き起こしやすいと指摘している。つまり、学生が教師や実習グループとの良好な関係に高い期待を寄せれば寄せるほど、期待する結果が得られなかった場合、ネガティブな情動反応や実習意欲の低下につながりやすいことを意味する。以上のことから高すぎる期待を持つ学生にも細心の注意が必要と言える。

#### 4. 臨地実習前のソーシャル・サポート

家族サポートではいずれの項目も平均得点が高く家族との良好な関係がうかがえた。最も平均得点が高かった項目は「②悩みや不満を言ってもいやな顔をしないで聞いてくれる」の5.48 (±1.66)であり、同居している家族は看護学生の悩みや不満を日ごろから受け止めている様子が示された。

友人・知人サポートで平均値が最も高かった項目は「②悩みや不満を言ってもいやな顔をしないで聞いてくれる」の5.57 (±0.97)であり、家族サポートと同様に看護学生は悩みや不満を受け止めてくれる友人を持っていることが示された。

ただし、家族サポート得点の標準偏差は±9.27であり、友人・知人サポート得点の標準偏差±6.07と比べて大きかったことから、親元を離れて生活をしている学生の家族サポート得点が低くなりばらつきを生じた可能性が推察された。

#### 5. 臨地実習前の心理社会的変数間および質問項目間の関連

##### 1) 状態不安と特性不安

相関分析を行った結果、状態不安と有意な関連を示したのは特性不安のみであった。普段の不安が高ければ測定時の不安は高まることは当然の結果といえる。

##### 2) 特性不安とコミュニケーション・スキル

状態不安と中程度の関連 ( $r=0.49$ ) が認められた特性不安はコミュニケーション・スキルと有意な負の関連があった。とくに、「①自分の感情や行動をうまくコントロールする」「⑥周囲の人間関係にはたらきかけ良好な状態に調整する」には有意な負の関連があった。このことから、不安の高い本研究の対象者は、自己統制や関係調整が苦手である可能性が示唆された。

日本人の大学生は、一般的に応答的な行動に関わる「解読力」「他者受容」のスキルが優れていることが報告<sup>11)</sup>されており、看護系大学生の結果においても「他者受容」の得点の高さが報告<sup>18)</sup>されている。看護系大学生は学習の過程で「対象者を常に優先すること」を求められることが多く、これが「自分のことを後回しにする」という行動様式に影響を与えている可能性も考えられる。また、有意な負の関連があった「自己統制」「関係調整」は管理的なコミュニケーション・スキルであり、核家族化・少子化が進み様々な人々との濃密な関わりが薄れている現代においては、学生達が「自分を大切にすることが他者のことも十分に配慮する」<sup>19)</sup>アサーティブなコミュニケーションを必要とする場面が少なく、意識化および訓練されていないことも考えられた。

アサーティブなコミュニケーションを苦手とする学生は、普段の学生生活においても自己の感情調整や人間関係の調整に苦慮しており、それが普段の不安を高めている可能性が考えられた。

##### 3) コミュニケーション・スキルと知人・友人サポート

コミュニケーション・スキルは、友人・知人サポートと有意な関連を示した。特に「④(自己主張)」や「⑤(他者受容)」「⑥(関係調整)」のコミュニケーション・スキルと、知人・友人サポートには関連性が認められた。

今回の調査ではどちらが先行要因であるかは特

定できないが、コミュニケーション・スキルが向上することで友人・知人との人間関係が良好になり、友人・知人サポートを得やすくなる可能性が考えられる。また、ソーシャル・サポートはストレスや不安を低減することが知られており<sup>8)</sup>、より安定したソーシャル・サポートを学生が実習中に受けるためにもコミュニケーション・スキルの上達は重要であると考えられた。

#### 4) 友人・知人サポートと家族サポート

友人・知人サポートは家族サポートと有意な関連を示したが、全ての項目ではなかった。これは友人・知人から良好なサポートを得ていても家族からも良好なサポートを得られているとは限らないことを意味している。両者は直接的な関係というよりはなんらかの要因を介して間接的な関係にあると考えられる。

### 6. 教育的示唆

今回調査した看護系大学生は普段から不安が高く、臨地実習前はさらにその不安が高まることが示唆された。また、教員や実習グループの学生に対する高い期待を抱いており、他者に対する依存心が高い傾向が示唆された。一方、コミュニケーション・スキルは他者受容の得点が高く表現力の得点が高いことからアサーティブな自己表現を苦手とする傾向も示された。また、コミュニケーション・スキルが低い者は、特性不安が高い傾向が示唆された。

以上のことから、本対象者には普段の学生生活から不安を低減させる対応が重要であるが、特に実習前は不安と同時に他者への期待も高まり、不安定となっている可能性があるため、注意して関わる必要があることが示された。具体的対応としては学生が自身の感情を自覚し調整できるよう関わることや、アサーティブに自分の意見を相手に伝え他者との良好な関係を調整するスキルを身につけサポートを得られるよう支援してゆく必要性が示唆された。

### 7. 研究の限界

本研究は、都内の新設 A 看護系大学生のみを対象に調査されたものであり、新設看護系大学の学生の特徴として一般化できるものではない。また調査用紙についても信頼性と妥当性の検討が不

十分である。今後は更に調査大学数を増やして検証を重ねていくこと、調査用紙の精度を上げることが必要である。

## V 結 論

都内新設 A 看護系大学の大学生 85 名を対象に、臨地実習前の不安、実習意欲、実習期待、コミュニケーション・スキル、家族や友人・知人からのサポートの心理社会的状況と変数間の関連を検討した結果、以下のことが明らかになった。

1. 臨地実習前の状態不安は成人女性や大学生より高く、62.4%が非常に高い不安者に該当し、特性不安も成人女性や大学生より高いことが明らかになった。
2. 実習意欲は中程度でありながらも実習期待は高く、なかでも「教員からの適切な指導」「実習グループ間での良好な関係」に期待が集まっていることが示された。
3. コミュニケーション・スキルは「他者受容」「解読力」が高く、「表現力」や「自己主張」「自己統制」は低いと自己評価されていた。
4. 家族および友人・知人からサポートを受けていると知覚していた。
5. 心理社会的変数間では、状態不安と特性不安、特性不安とコミュニケーション・スキル、実習意欲と実習期待、コミュニケーション・スキルと友人・知人サポート、家族サポートと友人・知人サポートで有意な関連性を認めた。なかでも、状態不安と関連を認めた特性不安はコミュニケーション・スキルの「自己統制」「関係調整」と負の相関を示した。
6. 以上の結果から、実習前の学生の不安は強く、注意して関わる必要性が示唆された。学生が自分の感情をコントロールできるよう、また他者との関係調整のためのアサーティブなコミュニケーション・スキルを身につけるよう関わり、ひいては学生がソーシャル・サポートを得て不安を低減できるよう支援してゆく必要性が示唆された。

### 引用文献

- 1) 渡辺千枝子, 垣内いずみ, 嶋崎昌子, 他: 看護学生が実習で感じる達成感と臨床実践に対する不安——最終実習の前後における期待と体験に焦点を



- あてて——, 松本短期大学研究紀要, 23, 77-82, 2014.
- 2) 近村千穂, 石崎文子, 小山矩, 他: 看護臨床実習におけるストレス状況と性格との関連, 県立広島大学保健福祉学部誌, 7(1), 187-196, 2007.
- 3) 前川利枝, 大石ふみ子, 櫻井しのぶ: 看護学生のはじめての臨地実習に対する思い, フォーカスグループインタビューによる分析, 三重看護学誌, 8, 131-136, 2006.
- 4) 飯出美枝子, 三木園生, 澁谷貞子: 実習前後の看護学生の不安の変化について——STAIXを用いての分析——, 桐生短期大学紀要, 16, 65-69, 2005
- 5) Ashikaga M., Yoshida A., Fujikawa C., et al.: Ego states of nursing students assessed by ego-grams: with special reference to the level of anxiety during a nursing practice course, 藍野学院紀要, 14, 25-31, 2000.
- 6) 岡部聰子: 看護学生の実習不安と対処行動に関する研究, 東京都立保健学会誌, 1(1), 37-44, 1998.
- 7) 林裕美, 畑中あかね, 勝間みどり, 他: がん患者を受け持つ学生の実習指導(第2報)——臨地実習における看護学生の不安・ストレスに関する研究事例の検討——, 神戸市看護大学短期大学部紀要, 17, 103-113, 1998.
- 8) 三浦正江, 上里一郎: 中学生の学業における心理的ストレス——高校受験期に実施した調査研究から——, ヒューマンサイエンスリサーチ, 8, 87-102, 1999.
- 9) 岡安孝弘, 島田洋徳, 坂野雄二: 中学生におけるソーシャル・サポートの学校ストレス軽減効果, 教育心理学研究, 41, 302-312, 1993.
- 10) 中里克治, 水口公信: 新しい不安尺度 STAI 日本版の作成, 心身医学, 22, 107-112, 1982.
- 11) 藤本学, 大坊郁夫: コミュニケーション・スキルに関する諸因子の階層構造への統合の試み, パーソナリティ研究, 15(3), 347-361, 2007.
- 12) 石毛みどり, 武藤隆: 中学生における精神的健康とレジリエンスおよびソーシャル・サポートとの関連——受験期の学業場面に着目して——, 教育心理学研究, 53, 356-367, 2005.
- 13) 久田満, 千田茂博, 箕口雅博: 学生用ソーシャル・サポート尺度作成の試み(1), 日本社会心理学会第30会発表論文集, 143-144, 1989.
- 14) 中里克治, 下仲順子: 成人前期から老年期にいたる不安の年齢変化, 教育心理学研究, 37, 172-178, 1989.
- 15) 水口公信, 下仲順子, 中里克治: 日本版 STAI Form X 使用手引(増補版), p.12, 三京房, 京都, 2012.
- 16) Deci, L. Edward, Flaste Richard. (Eds.): Why We Do What We Do. G. P., Putnam's Sons, New York, 1995, 桜井茂男監訳, 人を伸ばす力 内発と自律のすすめ, 新曜社, 東京, 1999.
- 17) 伊藤まゆみ, 塚本友栄, 佐藤みつ子, 他: 看護学生が患者とコミュニケーションをとる時の目標の適切性, 日本看護学教育学会誌, 12, p.190, 2002.
- 18) 河内浩美, 池田かよ子: 看護学生における SOC (Sense of Coherence) とコミュニケーション・スキルの実態——実習の経験別による比較——, 新潟青陵学会誌, 7(1), 57-62, 2014.
- 19) 塚本友栄: 看護学生が直面しやすい問題, グレック美鈴, 池西悦子 編, 看護教育学, 192-197, 南江堂, 東京, 2013.